救済の多様性　生長の家 ③

天理大学国際学部教授
山田　政信　*Masanobu Yamada*

（2）プロテスタントの場合

天理教の事例で考察した元プロテスタント信者は、都市生活者の疎外感や孤独感といった日常生活における苦悩からの解放を救済として捉えていた（Vol.17, No.3）。それはまた、匿名的な生活のなかで信頼できる誰かと繋がれるようになりたいという意思の表れだった。しかし、生長の家の語りにはそうした人間同士の関係性よりも「神」や究極的な「真理」を求めるという志向性が強く感じられる。

生長の家のルイザは天理教のホザナ（Vol.16, No.11）と同じように「真理」の場所を探していたという。白鳩会の会長をしている彼女は小学校教師を定年退職し、生長の家の教化活動に熱心である。

> 「真理」の場所を探していたんです。生長の家を知った当時は、夫と別れて間もない頃でした。夫婦関係のもつれが原因で分かれたのです。主人はとても乱暴で、私に暴力を振っていました。私は結婚した頃は幸せだったのに、どうして苦しむようになったのか知りたいと思っていました。生長の家に来てはじめて苦しみの理由、原因がわかるようになりました。そして、私がこの世に生まれていることの目的がわかりました。私はカトリックの家庭に生まれましたが、プロテスタントの影響を受けました。私の祖父がアセンブレイア・デ・デウスで、私は子供の頃から聖書を読むのが好きでした。でも、いくつかの章句に疑問を感じていました。例えば、「また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう（ヨハネ 8:32）」とあります。私はその「真理」が何かを知りたかったのです。夫婦間のこともそうですが、幼年時代からも苦労が耐えませんでした。ずっと「真理」が何で、どのように私を解放してくれるのか、ということが知りたかったのです。また、こうもいっています。「盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。私がきたのは、羊に命を得させるためである（ヨハネ 10：10）」。イエスが現れたというのに、なぜ私が苦しまなければならないのか、と思っていました。牧師にその意味を尋ねましたが、納得のいく答えは返ってきませんでした。ですから私は他の宗教を探すようになったのです。
>
> ある奥さんが私に生長の家の雑誌を貸してくれました。そこに私の求めていた答えを見つけたのです。「真理」とは、「人間・神の子」、「神は生命だ」ということだったのです。「人間は神の子」だから、その事実を認識すること、神は私たちの体の身体にいるということ、「無限の力」、愛、智、が私の中にある、ということがわかりました。神との繋がりを理解することで、私は自分自身を解放することができました。そして、実際に周囲の状況が良くなりました。それから私は生長の家の本をたくさん読み、教化部にも通うようになりました。

人間は真理の生命そのもので神の子であると説く人間観は、同時に生長の家の神観でもある。教団のそのようなコスモロジーが彼女を救いに導いた。「天地一切のものと和解せよ」という生長の家のメッセージは、神と彼女の「合一」をもたらし、力と愛と勇気を与えた。知覚によるこのような救済のありようは、極めて自己完結的であり、かつ他人に依存しないという自律性を持っている。これは生長の家の特徴の一つと言えよう。

では、問題の発端となった離婚に関してはどのように折り合いを付けたのだろうか。彼女は次のように述べている。

> 生長の家に入信した頃はすでに離婚していたわけですが、結局その夫との和解はありませんでした。しかし『生命の實相』のなかに離婚について書かれている部分があって、そこでは離婚が必要な時もある、とあるのです。谷口先生が書かれたその部分が私にぴったりと感じられたんです。どういうことかというと、夫に対する私の任務は終わったということなんです。カルマによって定められた結婚でしたが、私が償わねばならないことがらが 22 年間で全てなくなったということなんです。私は前世に良くない種を植えてきたから、その人と結婚することになったのですが、結婚した理由は私がカルマへの償いをしなければならなかったからなのです。換言すれば、私は結婚生活を通して自分自身を清めてきたということなんです。つまり、その結婚のおかげで私は成長することができ、結果として離婚したのです。借金を返した、とも言うことができます。

「償いと試練」というモチーフは、まさにカルデシズムの世界観そのものだが、生長の家においても同様に語られていることは興味深い。しかし、カルデシズムでは「償いと試練」は世代交代してもなお消えずに残るとされるのに対して、ルイザは彼女一代で解消したと理解している。ルイザは、カルデシズムの教理を学んだ訳ではなかったが、このような理解の仕方はカルデシズムの教えを知っている者には関心が湧くだろう。

講師である彼女は、教化部の壇上で次のように話す。

> 生長の家は、聖書に書かれた言葉が力を持ち、重要だということを説いている唯一の教えです。言葉が人を殺すこともできれば、人を建てることもできる。イエスは、「あなたは、自分の言葉によって正しいとされ、また自分の言葉によって罪ありとされるからである（マタイ 12:37）」と言われました。だから、生長の家は言葉を重視するのです。いい運命も悪い運命も、私達自身の言葉によって決まってくるのです。熱心なキリスト教徒でさえ、そのことがわかっているとはかぎりません。カルデシスタでもカトリックでもプロテスタントでも、そのことを強調しないのです。ですから、生長の家の教えを真剣に勉強すれば、「良きキリスト教徒」になれるのです。

生長の家で求めていた「真理」に出会い、それに納得した彼女は聖書の言葉に基づいて生長の家を受容した。プロテスタントにおける経典的なキリスト教の信仰がプッシュ要因となって生長の家の信仰を受け入れさせたのである。こうして培われる信仰は、他者との対面接触的な関わりを必ずしも必要としないのである。